

第 355 回 京 都 外 科 集 談 会

昭和 34 年 3 月 29 日

(1) 肝壊死発生と肝動脈

外 I 石 黒 稔

犬に於て、総肝動脈・胃十二指腸動脈・右胃動脈（及び左胃動脈より肝に到る小枝）を遮断すると、肝に到る動脈血はほぼ完全に遮断される。之に対し大動脈より墨汁或は着色合成樹脂を注入し、爾他の副血行路と生存との関係を検討した。1) 上記遮断術後長期生存せる犬に於て若干の動脈性微細枝の肝内分枝が認められはしても、何れもその長期生存を理由づけうるに足るものではない。2) 遮断後抗生物質を使用しながら肝壊死発生に依り死亡した犬に於ても全例死亡時若干の動脈性細小枝が肝内に分枝し、中には相当有力な動脈枝の肝内分布が見られるものすらあつた。3) 意識的に右胃動脈を残し抗生物質を使用しても壊死発生死亡する例がある。之等の事実から肝壊死発生に最も重大な関係があるのは、総肝動脈と胃十二指腸動脈であり之以外の経路から肝に到る動脈枝残存の有無は肝壊死の発生、更に犬の生死には無関係で、遮断に依る一時的な肝循環障碍が去除できれば肝は門脈血行のみに依つて存続しうる。

(2) 肝動脈血流遮断による肝壊死発生機序

外 I 中瀬 明・本庄 一夫

肝動脈血流遮断後の肝変化の肉眼的追求、血清 ADS 及び肝フェリチンの測定より、遮断後肝壊死の発生基盤として術後 3 時間より次第に発現する肉眼的に限局性の不可逆性嚮血を認め、これの発生にフェリチンが関与するものと考えた。

又ペニシリン 10 万単位投与による死亡率の減少もかかる観点より説明した。

更に肝フェリチンの遊離を抑制するか、又はフェリチンの特異な作用を阻止し、壊死発生をその前段階にて中断するべく、アトロピン及びダイベナミンを使用し、更にアトロピン及びアセチルコリン併用にて壊死発生を著しく阻止し得た。

正常犬における肝動脈血流遮断後の肝壊死発生機序の一端を明らかにし抗生物質を用いずして遮断後の死亡率を著しく低下せしめ得た。

(3) 不可欠脂酸の特異的栄養効果について

2 ~ 3 の実験的研究

外 II 松 田 晋

(4) 胃液蛋白に関する研究 (第 5 報) 胃癌胃液ペプタイトの Paper-electrophoresis-Polarogram とニンヒドリン反応

外 I 筧 守・篠原 秀幸

内 I 笹井外喜雄・久保 勝彦
脇坂 行一

1) 胃液のメタノール上清中に検出される呈蛋白物質は胃液ペプタイトとよぶが、有酸性胃癌胃液に最も増量する。これは無酸性胃癌胃液に最も増量するペプシン易消化性蛋白 (SSA 沈澱性) に由来することが、Paper-electrophoresis-polarogram の分析、および 131 I アルブミン添加実験によつて判明した。かかる蛋白体が胃液内に分泌されるのは、胃粘膜上皮の変化 (萎縮性過形成、腸腺化生) と深い関係がある。

2) 胃液蛋白 (非透析) の泳動濾紙上における Ninhydrin 反応は胃癌胃液 (有酸・無酸をとわず) に最も広く、かつ強く陽性であり、これは塩酸ペプシン系以外の成因によるアミノ酸と低級ペプタイトがその生起物質である。田崎氏の Ninhydrin 反応も、そのメタノール沈澱をメタノール洗滌するほど反応は弱まることなどより、上と類似の発現機構が考えられる。

3) 人の胃癌組織よりつくつた Toxohormon ONO は、対照としてつくつた健全胃粘膜の製剤に比べて著しく Polaro-activity (同一濃度における波高) が低下している。従つて Toxohormon ONO 分画 SH, S-S 基が不安定であると考えられる。この特徴は胃癌胃液の P. gram にも認められた。

(5) Sandmeyer 犬における下垂体の組織学的研究

外 I 勝 田 正 明

Sandmeyer 犬は、腭全摘犬に比してインシュリンの需要量が多い。之は一見逆の関係の様に思われる。先に当教室の長谷川は腭全摘犬の下垂体前葉の色素細胞の減少を証明して、腭全摘犬は Houssay の犬に近づくものと考えた。

我々は、之に続いて Sandmeyer 犬について下垂体の腺細胞構成を調べ、むしろ正常犬に近いという値

を得た。

又1例のみであるが、臍切除が過大で、臍全摘犬に近い病像を示したものは、下垂体前葉が臍全摘犬に近い値の変動を示した事を経験した。

これらの事実から、一つの Schema を提示して、総合インシュリン需要量(残存臍の分泌するインシュリン量と外来インシュリン量の合計)という概念を導入し、之と下垂体前葉の組織構成と一脈の関連ある事を認め、Sandmeyer 犬のインシュリン需要量の多い事を一部説明し得たものとする。

- (6) 臍全摘犬に於けるインシュリン感性和肝糖原量との関係

外I 八尾 英一郎

- (7) 脂質投与の実験的糖尿病発症抑制乃至促進作用機転の本態

外II 日笠 頼則・里村 紀作

脂質の投与が実験的糖尿病発症に対し、どのような態度を示すかを天然油脂並に合成単一グリセライドを使用して検討した結果、

- 1) 間接的酸化型式を営む比率の大なる脂酸(ケト原性大)を比較的多く含有する脂質は糖尿病症に促進的に作用するのに反して、直接的酸化型式をとる比率の大なる脂酸のみからなる脂質は抑制的に作用する。
2) このように投与脂質の性格によつて、糖尿病の発症に対して相反した態度が認められる理由は、(i) それら投与脂質の肝に及ぼす影響が大きな因子となり得る。(ii) 更に直接臍ラ氏島のβ細胞に及ぼす因子をも考慮すべきであることを知つた。換言すれば、ある脂質はβ細胞内の亜鉛と発症物質との結合を促進し、ある脂質はそれを抑制するものということが出来る。

- (8) 余の改良した乳腺腫瘍中の性ホルモン測定について

外II 三原 丞治

先に第6回内分泌西日本地方会に於いてイオン交換樹脂 Amberlite IRA 400 (OH型) 吸着法を発表したが之に更に改良を加え他のイオン交換樹脂 Amberlite IR 120 (H型), Dowex 3 (OH型) に Benzenoid Steroids, 3 keto steroids が吸着されない事を確認し之によつて組織抽出物中の不純物を或程度除き紫外外部吸収 280m μ , 240m μ に於いて両ホルモンを測定した。マストバチー19例, 乳癌10例, 正常例4例について、マストバチーでは平均値からみて相対的 Estrogen 過剰状態にあると云える、しかし、両ホルモンの比が正常

範囲のものもあつた。之は尿中の Estrogen/17KS の成績と略一致する。乳癌患者に於いては両ホルモンの比がマストバチー患者程増加は認められなかつた。

- (9) 長期意識障害を伴える脳腫瘍剖検脳に於ける間脳の組織学的変化

外I 大谷 圭三

半月乃至11ヶ月に亘り意識障害を呈した脳腫瘍9例(附:脳出血1例)の剖検脳について脳幹の連続切片を作製し、傷害範囲を組織学的に決定した。

変化は一般に間脳に著明で、特に1ヶ月以上の昏睡5例中の4例で視床の変化が高度であつた。視床下部でも4例に高度の変化を認めたが嗜眠、昏睡各2例ずつであつた。

全例を通じて見ると、視床の内側特にその後部及び視床下部に最も変化が多く、従つてこれらの部位が意識障害に関係深いことを推定させる。重要なことは、ここに述べた症例では何れも何らかの手術操作を契機として昏睡に陥つてゐることである。これは上記部位の腫瘍破壊によつて昏睡準備状態とも云うべき不安定な状態にあつたものが、手術の刺戟或は術後の浮腫等によつて急速に代償不全に陥つて昏睡を来したものと思われる。

- (10) われわれが作成した漸進的冠動脈狭窄について

大阪医大 外科 ○麻田 栄・中村和夫
武内敦郎・栗山隆興・村川敏雄
竹本晋三・大沢一博・今中勝治
入江義明・鈴木昭二・隠岐和彦
椎藤 勇・板谷博之

Dicetyl Phosphate によつて生ずる強大な肉芽を利用して、犬の左冠動脈前行枝起始部に漸進的狭窄を作成し、この犬について種々検討を行つた。

狭窄は術後10日頃から始つて20日~1ヶ月後に最も著明となり、全実験例45例中78%は冠動脈断面積が1/2以下に、56%は1/4以下に縮小した。かかる冠狭窄は血管周囲の結合織増殖に加えて、内膜の肥厚や血栓の形成を伴うものである。高度の狭窄を生じた犬では、心電図学的にST, Tの変化や期外収縮が発生し、心筋には梗塞像乃至は小斑状結合織増殖が見られた。

10%低酸素負荷試験では、冠狭窄の程度が強くと、心筋に小斑状結合織増殖を呈したものに於て、ST, Tの変化又は二連脈が誘発され易く、更に狭窄部末梢の冠逆流量測定、合成樹脂鋳型標本或は Schlesinger 氏

法等によつて冠内副血行路の発達状態を検討すると、狭窄が高度となる程冠内副血行路はよく発達するが、冠動脈結紮犬と比較すれば軽度であり、又逆流量の増加した犬では心筋に於ける小斑状結合繊維増殖、或は低酸素負荷試験が陽性を呈するものが多かつた。

次いでかかる漸進的冠狭窄犬に心・肺癒着肝を施行してその効果を検討した所、正常犬を用うる場合よりも心肺間の癒着が遙かに高度で、その中には肺から心臓へ向う副血行路がよく発達することを、血管造影並びに肺心臓灌流実験から立証し得た。

(11) 門脈再建に関する研究

大阪医大 ○板谷博之・伊達政照

西本勝美・森野 勝・榎藤 勇
麻田 栄

臍頭部癌は比較的早期の症例でも門脈周囲に浸潤を来している場合が多いので、門脈切除・移植による門脈再建が可能となれば、臍頭部癌の切除率・根治率は更に向上するものと考えられる。そこで先ず、犬で門脈遮断を行い、その死因は主として門脈領域下の血液鬱滞によるショックなることを認めたので、上腸間膜静脈分枝と股静脈との間に短絡を造設し、門脈血を大静脈系へ移す法を考案した処、約1時間の門脈遮断が安全に実施しうる様になつた。次に、門脈切除後の門脈血は肝を通して下空静脈へ流してやるのがEck氏瘻造設よりもすぐれていると考えられるので、血管移植による門脈再建を試みた。使用した移植方法は新鮮自家静脈片、70%アルコール固定動静脈片、及びナイロン、テトロンである。移植実験24例中、17例が2週間以上生存し、門脈造影により新鮮自家静脈9例中4例、アルコール固定血管4例中2例の開存を認めたが、合成繊維移植例は全例閉塞を示した。しかし完全閉塞を来した症例に於ても副血行路の発達が著明で全例生存し、この事は、副血行路の完成迄は少くとも移植血管が血行を維持していたものと推定された。以上の成績は門脈切除、移植による門脈再建の可能性を示唆するものとする。

質問 (Q. 本庄助教授, A. 板谷)

Q. 門脈切除をした範囲は

A. 0.5~1cm

Q. その部は?

A. Milz-venen と上臍静脈の間である

Q. つまつた症例は生存しているか

A. 生存している

(12) 冠不全の外科的療法に関する研究 (第4報)

大阪医大 ○麻田 栄・武内敦郎
中村和夫・鈴木昭二・竹本晋三
村川繁雄・栗山隆興・大沢一博
隠岐和彦・榎藤 勇・今中勝治

冠不全に対する手術々式として、現在 1) Cardiopericardiopexy, 2) Beck I, 3) Cardioomentopexy 4) BIMAL, 5) Vineberg, 及び 6) Lezius, 7) Carter, 8) Harken 等の Cardiopneumonopexy があり、9)我々も鬱血肺を用いる心・肺癒着術を考案したことは既に発表した。これら手術の優劣を比較する目的で、予め各手術を実施した犬の前下行枝起始部を1カ月後に結紮し、これに耐えて生存した犬を更に数カ月経過後に屠殺して、梗塞の有無、程度を病理組織学的に検索し、9), 2), 1) が優れている事を知つた。

この心・肺癒着術の優秀な効果の作用機序については、冠動脈鑄型の観察により冠内副血行路の発達を認め、又癒着肺を色素液を用いて灌流し肺から心筋への移行量を測定する肺・心灌流実験によつて、心肺間の癒着が高度である程、又心筋に乏血状態が存在すると肺から心筋へ血液がよく供給される事を推定しえた。尚、冠不全の手術は手技が容易で、侵襲や合併症の無い事が望ましく、この点臨床上術式の撰択には慎重を要することを述べた。

(13) 脳動脈瘤及び脳血管腫の外科的経験

外1 半田 肇・渡辺 浩策

過去3年間に取扱つた脳動脈瘤20例(内頸動脈及びその分枝10, 前大脳動脈及び前交通動脈9, 中大脳動脈1), 脳血管腫11例(前頭・頭頂部1, 前頭・側頭部2, 側頭・頭頂部2, 頭頂部3, 静脈洞合流部1, 脳膜2)の外科的治療経験に就て述べた。

内頸動脈瘤10例。開頭術を行つたのは4例、他の3例は頸動脈結紮を行つた。開頭術を行つた4例中2例に成功したが、この部の動脈瘤は血管写で動脈瘤のneckが余程明瞭に認められるもの以外は頸動脈結紮の方がよい。前大脳動脈瘤9例。3例は術前に急死。剖検では2例に脳内血腫、1例は脳幹部を圧迫する硬膜下血腫を認めた。残りの6例中4例に直接侵襲を加え、何れも全治せしめ得た。この部の動脈瘤は出来る限り直接的侵襲を加えるべきで、その手術時期は患者

の全身状態及び血管写の所見で決定出来る。

中大脳動脈瘤 1例、及びその領域の血管腫 2例に直接的侵襲を加え、成功した。中大脳動脈は起始部より5~6cmの間隔であれば到達は容易である。

頸動脈結紮 9例に試み 1例にも副作用を認めなかつた。副作用の予防として結紮前後の網膜動脈圧の変動及び血管結紮部より distal の部の血圧の変動の測定は余り意義がない。

(14) 肺水腫の発生と不可欠脂酸をめぐる 1 ~ 2 の問題

外Ⅱ 日 笠 頼 則

質問 石 上 浩 一

食道噴門癌に対して腹部から手術すれば、肺水腫発生率が低い点より、縦隔をいじること、特に縦隔リンパ節の廓清、迷走神経に対する侵襲などもみのがせない因子だと考えます。肺癌根治手術として、縦隔リンパ節の廓清を伴う根治的肺切除を施行した時には、単純性肺切除の時にくらべて発生率が高いこともその一つの証拠だと思います。実験に関して①動物における肺毛細血管内血漿膠滲圧の状態②肺胞喰細胞をのぞいた肺毛細血管における脂肪酸分布③脂肪乳剤の食道手術直後の使用が肺機能に対して与える影響等について、ご教示下さい。

(15) 肝動脈遮断後の病理態生理

外Ⅰ 本 庄 一 夫

(16) 門脈に於ける Catecholamine の動態

外Ⅱ 木 村 忠 司

質問

本庄助教授 副脾で門脈圧が下るときホメオスタシスに脾が貢献したのであろう。

木村助教授 パンチの中にホメオスタシスによかつたものと悪かつたものとある。

荒木教授 Banti 氏病と Catecholamine とが直接関係があるかどうか？

木村助教授 それは今後摘出標本中の C, A を測り同時に脾の組織変化を比較すれば、その点が明らかになると思われるが、目下は不明であります。

(17) 肝循環の研究

本 庄 一 夫

Q: 木村助教授 A: 本庄助教授

Q. 肝硬変の Leber と正常 Leber の O₂ 必要量

A. しらべていないが O₂ の減少にもたえられると

いう報告がある。

Q. 肝動脈をとめると門脈が動脈血のようになるか？

A: V. porte の流れが早くなる。A-V shunt がある。

Q: 長石教授 A: 本庄助教授

Q. 機能血管と栄養血管とあり栄養血管を結紮することが出来る。老人に A. bronchial をくゞつて症状が軽快しないか。

A. 即断は出来ないが類似点はある。

Q: 国立京都病院 牧野 A: 本庄助教授

Q. 肝静脈は何本結紮して腹水犬としたか？

A. 外科学会雑誌参照。

(18) てんかんに対する外科手術の経験

外Ⅰ 荒 木 千 里

我国に於てこれ迄てんかんに対して行われた各種の手術方法を回顧し、荒木自身が行つた手術患者の遠隔成績調査について述べる。

調査患者は入院治療後約3年以上17年に至る各種てんかん患者 600 例で、問合せに回答したものが約 300 例。その中手術例と非手術例とが略々半数宛である。手術は焦点皮質切除が最も多く、次に腓尾側切除、其の他少数宛の試験開頭、植物神経手術、去勢、ロボトミー等である。非手術例の大多数に空気脳室撮影が行われている。

この調査の結果、非手術群の中に予期以上に多くの全治乃至軽快例（約40%）のあることが判明し、従つて手術群の方が、術式の如何を問わず、非手術群よりも好結果だという数字は得られなかつた。これは外傷性てんかんのみをとつてみても同様である。又退院後服薬しているのもあり、いないのもあり、この点は手術群も非手術群も同様である。

(19) 中枢神経系形成異常の成立機構、殊に 脳グリオームとの関連について

外Ⅰ 荒 木 千 里

小脳その他の脳部位のグリオームで、先天性發育異常の基盤の上に発生すると考えられているものが少ない。そのようなグリオームの好発部位と実験的脳奇形動物に於ける脳グリア異常の好発部位との間に何等かの関係があるかを知る為、妊娠中のマウスに催奇形処置（トリパン青、ウレタンの注射、レ線照射）を行い、分娩前日に取出した胎児の中、肉眼的奇形のないものに重点をおいて、その脳を連続切片とし、銀染色を行つて、未成熟グリアの残存乃至位置異常をしら

べた。又人間の奇形胎児（脳に多少とも奇形性変化あり）7例についても同様の検査を行った。

結局正常動物でも中枢神経系の中軸線に添つて未成熟グリアの残存、位置異常を認めるものであるが、奇形胎児ではそれが更に一層著明な傾向を認める。但しこれが直ちにグリオームの原基となるか如何かは断定し得ない。

荒木 教授

Q. マウスの自然発生のグリオームは胎児に生じたものですか。（石井講師）

A. 1年あまり立っているものです。

Q. 末梢の Nerven Plexus では発育が Gefäß よりもはやい、それ以上の分化はない。レントゲン等ではかける時期が問題となると思うので、時期によつて発生の様子がちがうと思うが？（木村助教授）

A. その時期の発育の一番さかんな所で異常がおこる。この時期のきめ方は村上の成績をかいた。

(20) 肺結核外科的療法の遠隔成績

青柳 安 誠

昭和21年1月から同32年6月まで京大結研並に關係施設30数ヶ所で手術し調査結果の判明した肺切除5273例、胸成2694例、空洞切開642例その他66例 合計8675例の観察結果から、適応が正しく行われるとその遠隔成績も略々相似ており、換言すれば、各手術々式にはそれぞれの適応があるからそれを誤たずに手術すべきものあることをのべ、またもし手術を行うならば、就労までの期間が短く、再発率の少ない肺切除術を行える時期而も就労率の何れも90%以上である、区域切除なり部分的切除なりの行える時期に内科医は外科へ送つて貰いたい、ということも数字を以て示した。

更に今まで肺切除もできず胸成もできないとして放置されていた重症肺結核に対して、われわれの空洞切開術がいかに偉力を発揮したかも数字を以て示した。

(21) 椎間板ヘルニア

近藤 鋭 矢

教室の椎間板ヘルニア手術例647例について見ると腰椎下部に圧倒的に高い発生率が見られる。本邦外科、整形外科86クリニックよりの調査回答及び自家経験を合せて頸椎部ヘルニア手術例は166例、胸椎部ヘルニアは僅かに25例を集め得たに過ぎず、先人の剖検結果と対比して甚だ奇異の感なしとしない。本教室に於て屍体55体につき観察した結果と手術例とを比較検討して、その疑点を一部解明することができ、椎間板ヘル

ニア発生の誘因として作業、労働時の異常な筋力作用や外傷が軽視されてはならない事を述べた。

次に上述86クリニックの協力を得て調査し得た結果から、本邦に於ける椎間板ヘルニアの診断、治療の趨勢につき述べると共に、主として腰部椎間板ヘルニアにつき本教室に於て近頃採用している骨形成的部分的椎弓切除術並びにその成績を報告し、特に成績不良例についてその原因を検討した。

(22) 筋神経終末の再生と機能に関する研究

整形 相田 良人

(23) 頸椎部骨軟骨症のミエログラフィー及び手術成績

整形 近藤 鋭矢・○安藤 啓三

大室 耕一・田坂 兼郎

昭和22年より昭和33年9月迄に頸椎部の椎間軟骨ヘルニア40例と変形性脊椎症14例に手術を行ったが、術前54例は脊髄麻痺のため社会生活困難又は不能であつた。

ミエログラフィーでは全例に所見を認めたが、完全ブロックを呈したものは4例に過ぎない。最近我々は腹臥位前後面、側臥位側面に於ける透視、撮影の他に腹臥位側面像、側臥位前後面像撮影（水平撮影法——仮称）を行つてその診断的意義を明らかにし得た。又造影剤の停留像はU又はH型が多く、その先端はヘルニア所在高位と一致する事が多い。手術成績は全治2、社会復帰した著効20、軽快9、不変10、悪化4、死亡8、不明1である。発病後5年以上経過していたものは7例中4例死亡した。

(24) 開胸による胸椎カリエスの手術経験

神戸市民病院整形 笠井 実人

佐々木正和・得津 雄司

吾々は原則として右側開胸により、胸椎カリエスの病巣廓清術を行ない、現在迄に11例に達した。数個の椎体がおかされている場合でも、両側に膿瘍を形成している場合でも、広い手術野の下に病巣の全貌を見きわめて、徹底した廓清が出来る。廓清後に生じた椎体の欠損部には、腸骨片の移植による前方固定術を行なうが、これによつて椎体の再建も可能である。又骨移植をする際に亀背を矯正して成切した例もある。麻痺のある場合には前方から入ると、脊髄との関係を明瞭に確認出来、又内突背の切除も容易かつ安全に出来る。

術後の膿胸を防止するためには、i) 膿瘍も含めて

病巣の徹底的な廓清を行なうこと。ii) 前縦靱帯、肋膜は密に縫合して、病巣と胸腔とは嚴重に遮断すること。iii) 術後速かに肺の再膨脹をはかり、死腔を残さないこと。この3つの条件が必要である。

質問 安藤 助教 授

1) 左突の Skoliose のある場合病巣が遠くて都合が悪いという様な事はないか？

2) 手術後尚ほ傍脊椎の濃厚陰影が残存していたのは左側に多いか。

笠井 実人

1) Skoliose の強い例には未だ遭遇しておらないが、Kyphose の強いものでは左を開くと Aorta が蛇行していて非常に操作がやり難かつた。

2) 確に左側に多いが肋膜前縦靱帯を開く部位がどうしても右よりになるので初期のものでは取り残したかと考えたが、十分膿を排除したと確認した場合でも、こういう影は残る。

関西医大 森 益太

手術侵襲の心肺機能その他全身性影響について、どの程度のデータを持って居られるか。

笠井 実人

肺結核で肺切除の出来る程度のものであれば大体出来ると思う。

森 益太

笠井博士はすべての胸椎カリエス症例に前方経路が最上の手術方法であるというのではなく前方経路の手術適応について検討されていること、推察する。将来決定された適応について御報告を願いたい。

笠井 実人

開胸術式の症例も経験を重ねて行けば自づから決定されると思う

桐田 良人

質問 肋骨横突起切除術を開胸による術式にかえたものには前者による再発例が多いとか、又は他の適応があつてのことでしょうか。

追加 肋骨横突起切除術によつて充分病巣廓清術が行いうる側にまで開胸を行うのは私の肺切をうけた経験からゆきすぎではないかと思う。

(25) 骨関節結核治療促進に関する実験的研究

2) 病巣廓清術後の修復過程における治療促進に関する研究

和風会 山本 忠治

実験的に既感染海狸に膝関節結核を惹起せしめ、その結核病巣進展時期の異つた滲出期、繁殖期、増殖期

に分けて病巣廓清術を施行し、その治療機転及び経過を病理組織、組織化学的に検討した。又之に SM 並びに合成ホルモンたる Methylandrosteradiol を単独或は併用投与して、その治療経過を比較検討し次の結果を得た。

1) 病巣廓清術後は関節結核病巣及び周囲組織に著明な血管新生と線維芽細胞出現がみられ廓清部の癒着形成過程と共に軟骨様細胞が作られ、軟骨或は骨化生による修復機転が見られる。

2) SM 非投与病巣廓清群は手術侵襲による2次的骨結核、転移巣撒布も強く、結核病巣自体には病勢の活潑化を招く。

3) 病巣廓清術適応時期に等しく思われるが、SM 投与下に行われるならば、その適応時期は巾のある範囲で適選適裁に行うことも1つの方法と考える。

4) Methylandrosteradiol 単独投与では手術侵襲による結核病勢活潑化が強度である。

5) SM 或は SM と Methylandrosteradiol 併用投与群のように病巣鎮静促進の良好なもの程、関節強直が強くなる。

(26) 骨関節結核病巣の石灰沈着状況に関する組織学的および組織化学的研究

和風会 加藤 宏

病巣廓清術、膿瘍搔爬術を行つた75例の骨関節結核症患者の病巣から、骨軟骨を含む諸組織を採取し、脱灰することなく組織標本とした。これらについて石灰沈着状況を組織学的および組織化学的に追求し次の結論をえた。

1) 軟部組織の石灰化は、滲出性病変、乾酪変性部出血巣などに多くみられその形は星雲状、顆粒状である。繁殖期病変にはみられない。増殖性変化部分では線維状束状の石灰化がみられる。

2) 骨の石灰沈着は石灰塩の減少であり、負の石灰化である。破壊の程度によつて、正常に近い骨梁輪郭から塊状、粗大顆粒状になっている。石灰塩が消失しても、骨梁輪郭のみがサフラニでみられその骨基質は PAS 反応陽性を呈す。

3) 石灰化部はヘマトキシリンで濃染するといわれているが、私の観察では必ずしも濃染せず、無関係の場合が多い。

4) 石灰化部は PAS 反応陽性に反応することが多いが、かえつて陰性に近いこともある。

5) アルカリ・フォスファターゼは石灰化部で陽性

に反応することもあるが、むしろ石灰化部よりもその周辺部で陽性に反応する場合が多い。

6) 石灰化部のメタクロマジー反応は殆ど陰性かまたは弱陽性である。

(27) 骨関節結核病巣内ストレプトマイシン濃度分布に関する研究 (第 5 報)
特にカナマイシンとの局所侵入性の比較に関する実験的研究 (その 2)

大阪医大整形 京大整形

近藤 茂

1) SM と KM は同一測定法、即ち鳥居氏重層法で測定できる。

2) 故に SM 又は KM の同一濃度溶液を重層した時それがどれだけ寒天内に侵入したかを比較すれば、寒天と言うコロイドの medium に対する MS 及び KM の侵入性は比較できる。

3) 然し、阻止帯の長さそのものの比較では此の実験は成立しない。何となれば阻止帯部に於ける両剤の濃度は同一とは言えぬから。

4) では、たとえば 100 γ /cc 溶液を重層した時、寒天の液接触面は 100 γ /cc であり、下方ほど寒天内濃度は減少する。この時 50 γ /cc の濃度は何の高さに分布するのか？

5) 今、100 γ /cc の阻止帯を A mm. 50 γ /cc の阻止帯を B mm. とすれば、100 γ /cc 重層寒天では (A-B) mm. 下方の部分が 50 γ /cc と考えられる。何となれば SM 又は KM については、その重層濃度の如何を問わず、阻止帯部の濃度は同一である筈だから。

6) 以上仮説から次の実験を行つた。

7) pH, 8.4, 8.1, 7.8, 7.5, 7.2, 6.9, 6.6, 6.3, 6.0, 5.7, 5.4

の寒天を使用し、鳥居氏重層法を 100, 50, 25, 12.5, 6.3, 3.2, 1.6, 0.8, 0.4, 0.2, 0.1 γ /cc の SM 及び KM について行い、その阻止帯の差を各々求め、両剤の相対する部の平均差を計算した。

8) pH 8.1 以上の場合と 6.0 以下の medium に於ては KM の侵入性が SM より優れ、7.8 と 6.8 の間では SM の方が優れていた。

9) 即ち、本実験から、病巣内 pH と抗結核剤の侵入性の間の関係と又抗結核剤投与時の適応について興味ある暗示が得られると思う次第である。

(28) リウマチ様関節炎の病理組織学的所見

関西医大整外 森 益 太

演者は数年来、従来諸家によつて肯定的でない所の本症の活動期の関節炎の病巣摘出手術を演者の独自の術式 Caprusynovectomy に依つて 48 症例 (中膝関節 30 関節) に就いて行い、臨床的知見と病理学的組織所見を比較した。急激新鮮に発症し shock 期に在る関節炎では滑液嚢の血管結合織中に、フィブリン析出フィブリノイド変性が認められ、水腫を存する活動性関節炎では浸出性炎と増殖性炎の併存が見られる症例と増殖性肉芽炎のみの見られる場合がありその際滑液膜下の円形細胞浸潤小血管の増殖充盈が著しい、特有な塩基細胞も此の時期に見られる。更に陳旧期の関節炎では細胞反応が消退し滑液膜下に小円形細胞の集積 (主に淋巴球) が所謂 Lymph-follikel となつて残存し更に結締織性増生と吸収が進行して、無細胞反応性のヒヤリン性癭痕炎に移行する傾向が強い、演者は以上からリウマチ様関節炎は組織学的に rheumatic リウマチ性その者であると結論した。

(29) 股関節結核の観血的症法について

国立京都病院 松村友昭他

第 356 回京都外科集談会

昭和 34 年 4 月

(1) 術後肺虚脱症の 5 例

外Ⅱ 吉田 良行・近藤 祐之
山崎 英樹

最近、著者らが経験した術後肺虚脱症の 5 例について報告し、性及び年齢、季節的關係、手術の種類、疾患との關係、麻酔との關係、肺の罹患部位、本症の発見と処置に就いてこれら 5 例の症例を中心として文献的考察をなし、特に ALEVAIRE の噴霧、postual

drainage、就中 Sante 氏法の有効性を説き、気管切開術を機を逸せず必要な時には行うべきものであることを述べ、軽症を含めて可成りの頻度に本症が発生するのであるから腹部の手術の際にも、肺の状態に気をつけて速やかに本症を発見して処置することが必要であることを強調した。

追加 木村 忠 司

数日後に突如発病すること、胃潰瘍手術後に多い事